

# 紀藤ヒロシさん (歌手)

## ヒットを目指して歌い続ける

ヒット曲を多く持つビッグネームの歌手もいれば、ヒット曲を狙って地道な活動が続ける歌手も大勢いる。そうした人の、歌にかける思いとは？ 今年、歌手生活三十五年を迎えた紀藤さんに聞いた。

橋幸夫のマネを褒められて

——普段はどのような活動を？

基本的には、地方局の歌謡番組やラジオに出演したり、イベントで歌ったりしています。知り合いのスナックや飲み屋さんで歌を披露することもありますね。定期的に歌を教えるもいるので、そういった活動も主軸です。いまいちばん力を入れている曲は、「死ぬまでだまして」(オリエンタルコード)。デビュー曲を新たに再レコーディングしたもののなんです。

に褒められ、それで歌手になりたい、有名になりたいと思うようになったんです。

——歌手になる努力を始めたわけですね。まずは有名になりたいという意識が強くて、俳優を



●きとう・ひろし (左から2人目、グラスを手にするのが紀藤さん) 1950年東京都生まれ。81年、「死ぬまでだまして」で歌手活動をスタート。同曲で「オリコン賞」受賞。2001年、「ひとり白馬へ」を「隼浩」名でリリース。その後、「夕焼けだんだん」「上野 浅草 隅田川」「浅草ごころ」を発表。15年にはデビュー曲「死ぬまでだまして」をセルフ・カバーした。写真は、応援してくれるスナックで

——歌手になったきっかけを聞かせてください。

昭和二十五年に東京・大田の馬込で生まれました。父は大工で、姉と兄がいて、その兄が原点です。兄は私が小学校二年のとき、電車で撥ねられ亡くなってしまったんです。優しくて野球好きで左利き。よく遊んでくれたのを覚えています。

兄を失い落ち込みました。そんなとき、テレビの「ロッセ 歌のアルバム」で橋幸夫さんの歌を聞きました。亡くなった兄に顔も声もとても似ていて、まるで生き写し。驚きました。それからは大ファンになって全部の曲を覚ええました。橋さんのマネをしたら周り

目指しました。高校生のときにテレビタレント養成施設に通い、俳優デビューをしたんです。映画監督の市村秦一さんの家族が経営する蕎麦屋さんで働いた縁で「ふれあい」(昭和四十七年)や「ひとつぶの涙」(昭和四十八年)、「はだしの青春」(昭和五十年)などの青春映画やテレビドラマに出演しました。

また、「戦後30年記念作品」と銘打った舞台「カラフトの詩」で、三國連太郎さん、風間杜夫さんと公演で全国を回りました。まだ風間さんが下積みの時期で、「同じ釜のメシを食った仲」ということで、彼とはいまでも交流があります。私の四十周年公演に来てくれたり、懇意にさせていただいています。

一方、俳優のギャラをやりくりして、ボイスレックスも受けていました。「赤いグラス」(アイ・ジョージ&志摩ちなみ)を作曲した牧野昭一先生の教室で、とても厳しい先生でしたが、歌の基礎をこの時期にきちんと学べたと思っています。

——街が、店が、歌手を育てた

——それから歌手デビューとなるわけですね。